

企業経営の「心・技・体」

国技として広く愛される大相撲。11月場所は福岡で開催され、初日から千秋楽までの15日間、多くの熱狂と興奮に満ち溢れる。力士が土俵にあがるまでの稽古と土俵上での勝負には、企業経営にも通じる清らかな「心・技・体」が結集されている。



戸村 智憲

日本マネジメント総合研究所
合同会社
理事長

日本の国技「相撲」について

相撲は、単に勝負を争う競技ではなく、古くから五穀豊穡などを祈る神事としてとり行われてきました。

もともと神事として始まったがゆえに、力士には礼儀作法が厳しく求められ、勝てば良いというのではなく、武道としての流儀や日本の文化を反映した美徳が求められるのです。

また、オリンピック競技種目の柔道のように重量級の区別はなく、土俵の上では巨漢の力士

も小兵の力士も、みな等しくまわしひとつで戦い、力と力、技と技のぶつかり合いが繰り広げられます。相撲において、小兵力士が巨漢の力士に土をつけるのは、見どころのひとつでもあります。

このような相撲のあり方は、企業経営の道にも通じるように思えます。同じ市場（土俵）で、資本金や企業規模にかかわらず戦う様と似ているのかもしれませんが。

毎日が「本場所」の企業経営

企業経営では、毎日が「本場所」で、常に成果と利益と資金繰りなどに迫られますが、相撲と同じく清らかにして健全な姿勢で、利益獲得を達成したいものです。

倫理やコンプライアンスといった脇を締めるマネジメントもあれば、顧客を魅了する攻め手の顧客マネジメント、小が大に勝つ知財戦略など、攻めと守りの両面で様々な創意工夫が求められます。

儲けられれば何をやっても良いわけではなく、社会的な規範を積極的に尊重し、企業の社会的責任を果たしつつ、健全な利益追求で企業の発展を進めなければなりません。さらに役員へ配慮し、モチベーションや会社を愛する心を醸成して、人を礎に「和をもって尊し」「和して同ぜず」とするマネジメントも重要です。

思い切つてぶつかる、つまりリスクをとって挑戦する場面や、立ち会いの変化のように意表を突くサービス・商品を開発・提供することで勝ちにいくこともあるでしょう。

また、万が一の際には、受け身をとってケガをしないようにする、つまりクライシスマネジメント（危機管理）で経営のダメージを最小化し、早期に立て直して復旧・事業継続し、負けを教訓に次の取組で勝てるよう自らを高める、しなやかな対応（レジリエンス）も求められます。

経営者においては、事業承継としてスムーズ

な経営のバトンタッチ、そして「年寄」「親方」などの立場での指導といった課題にも直面することでしょう。

常にプロの経営者・職人・スタッフなどとして精進を欠かすことなく、また、ひとときの栄華に浮かれて勇み足で窮地に陥ることのないように、大胆かつ慎重な足運びも、企業経営においては大切です。

そして株式上場を目指す企業には、横綱審議委員会のような上場審査が待っていたりもします。

■企業経営における「心・技・体」

「心・技・体」は、どれかひとつを突出して磨くというのではなく、バランス感をもって総合力として修練・習得していくものです。

企業経営における「心」は、経営理念や創業の理念に沿って、社会の役に立つ形で常に自己も他者も高め合おうとする姿勢です。精神論だけで押し切るのではなく、合理的でスマートな精神力を養っていきけるようにすることが大切でしょう。

昨今のメンタルヘルス対策への意識の高まりや、改正労働安全衛生法でのストレスチェックの義務化は、もしかすると、歪んだ精神論に基づく「心」を整え直すために一役買うかもしれません。

また、企業経営における「技」とは、言うま

でもなく技術やノウハウです。最近気になることのひとつとして、熟練工の退職による技術力の低下がありますが、定年後の再雇用でこれまでの技術やノウハウの伝承を図ることも必要でしょう。

最後の企業経営における「体」は、財務の「体力」や各種マネジメントの「体制」です。

これら3つの要素をバランス良く強化し、組織全体の力を伸ばすことが大切です。

相撲から学んだ要素を企業経営にも応用してみると、新たな成長戦略が描けたり、窮地を乗り越えるヒントが得られたりするかもしれません。

■「カド番経営」を脱するために

財務の「体」も乱れ、役職員の「心」も荒れ、技術やノウハウといった「技」も磨きを怠ってしまえば、あつという間に「カド番大関」ならぬ「カド番経営」に陥ってしまいかねません。経営における「心・技・体」を整えるために大切だと筆者が思う3つのポイントについて、ご参考までにまとめてみます。

①役職員の心を整えるために、経営理念や創業の理念に立ち返る

プロとしての仕事、いつの間にか、ノルマとしてこなすだけの作業・処理になってしまふことが往々にしてあります。そもそも何のために仕事をするのかについて、今一度見つめ直してみましよう。

②他社や業界にない自社だけの技術・ノウハウ

・工夫を高める

他と同じような「技」しか持っていないければ、価格競争に巻き込まれて、財務面でも疲弊しがちです。

特許出願とまでいなくても、業界で他社がやっていないようなことに思い切って取り組んでみることは、新たな成長を導く突破口になるでしょう。これは、小が大に勝つ定石でもあります。

筆者自身も、常に他にない何か新しいものを開発したり、昔ながらの古びたようなものの中に新たに活かせる切り口を見出そうと、日々精進しております。

③お金は、まず企業体の礎をなす「人」に投資する

大企業が大金を投資して工場をつくっても、過剰在庫や不良債権を生むリスク要因に転落するのはよくあることです。

しかし、「人」に対してはどれだけ投資しても、し過ぎることはありません。その人が、お金をかけなくても工夫して成長戦略や新たな突破口を見いだせる能力をつけられれば、結果的に研修などの費用はお手頃な「投資」となるでしょう。

企業経営の「心・技・体」とは、「人に始まり人に尽きる」というように、人を大切にすることなのだと思っています。

飛翔

11

2015. November

2015.11/15 vol.286

飛翔対談

株式会社 さえら

代表取締役会長 木谷 忠義 氏

「女性の夢をかたちにして40年」

日本経済の「いま」を読む

「観光ビジネスの規模感」

東京大学大学院教授 伊藤 元重

NCB まるごとサポート

「『アジアゲートウェイとしての FUKUOKA』を開催
地方創生の実現と地域インフラ」



西日本シティ銀行グループ

株式
会社

NCBリサーチ&コンサルティング